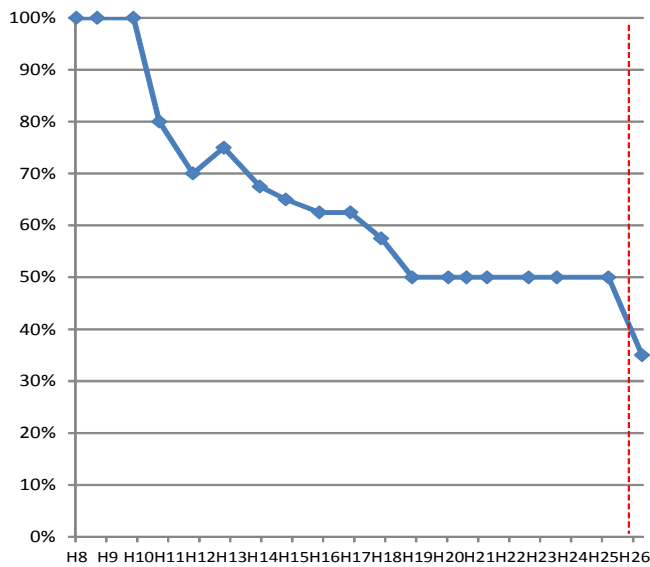


樹種名	ツクバネガシ	
科 目	ブナ科	
学 名	<i>Quercus sessilifolia</i>	
分 布	宮城県・富山県以西の本州、四国、九州、国外では台湾に分布する常緑高木。	
樹木特性	半陰樹であり、シイ類が優占する地帯よりも標高が高いところに生育している。	
用 途	建築材、器具・楽器材、しいたけ原木として利用。	
植栽本数/面積 (植栽密度)	60本/0.02ha (3,000本/ha)	
特 徴	<p>【樹形】 ツクバネガシ（衝羽根樅）はブナ科コナラ属の常緑広葉樹である。 葉は楕円形、やや扁平で表面はつやがある深緑、裏面はやや色の薄い緑色。葉縁には鋸歯がない。芽が伸びたあとに鱗片がぶら下がり、葉の付け根にしばらく残るのも特徴である。 雌雄同株で花期は5月頃、雄花序は垂れ下がった形で黄褐色の雄花を多数つける。雌花序は葉腋に直立し3~4個の雌花をつける。 沢沿いの急斜面を好む。柾目・板目ともに美しい紋様があり、紫檀の代用としても用いられる。 堅果は翌年秋に成熟し食べられる。 名由来は枝の先に葉が4個あり、やや輪生状に並ぶ様子がツクバネに似てることからついた。</p>	
試験地での様子	<p>ポット苗を植栽し、植栽後にコウモリガやカミキリムシ類の穿孔被害による枯死が発生している。このことから、山引き苗を補植した。 他のカシ類と比較すると現存率も35%と低い結果であった。</p>	  
被 害	<p>植栽後にコウモリガやカミキリムシ類の穿孔被害が発生した。 (延べ駆除本数 コウモリガ：3本、カミキリムシ類：3本)</p>	

ツクバネガシ 現存率



【現存率】

植栽後にコウモリガやカミキリムシ類の穿孔被害による枯死が発生していた。

平成 20 年度以降の枯死は見られない。

林内の照度調整を図るため平成 21 年度に本数調整伐を実施した。

平成 26 年度に毎木調査を実施した結果、現存率は 35.0%であった。

※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。

【根元・胸高直径】

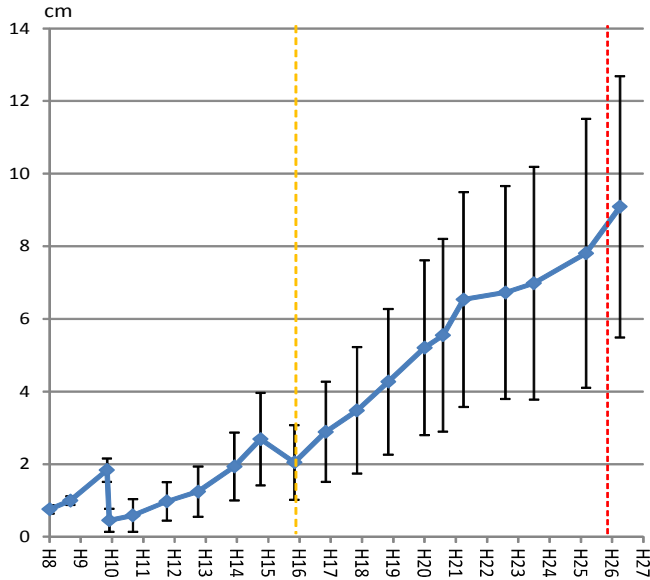
順調に成長している。

平成 26 年度に毎木調査を実施した結果、平均胸高直径は 9.09 cmであった。

※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。

※ オレンジ線は、根元から胸高へと測定箇所変更のため、データの連続性はない。

ツクバネガシ 根元・胸高直径



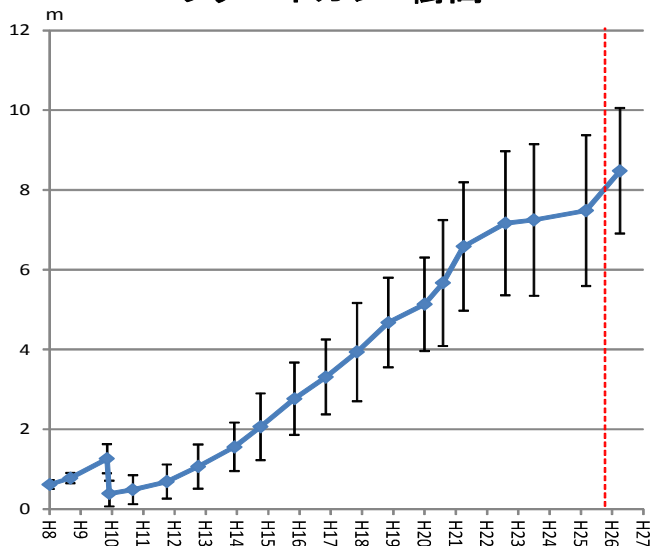
【樹 高】

順調に成長している。

平成 26 年度に毎木調査を実施した結果、平均樹高は 8.48m であった。

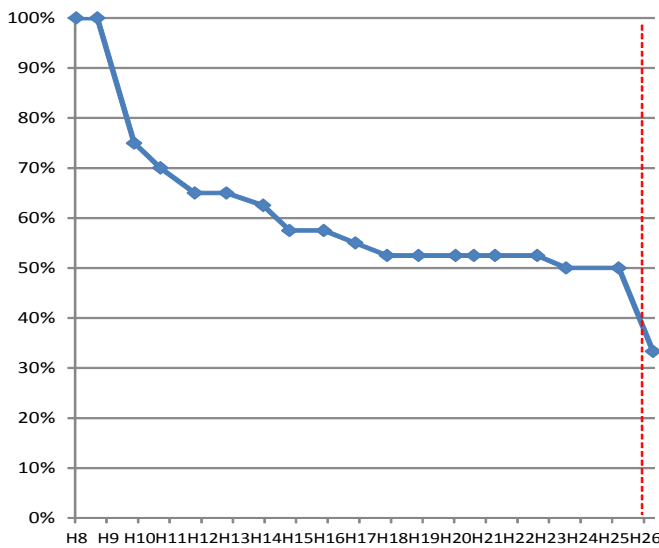
※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。

ツクバネガシ 樹高



樹種名	ツブラジイ（別名：コジイ）	
科目	ブナ科	
学名	<i>Castanopsis cuspidata</i>	
分布	常緑高木で、関東地方南部以西から四国、九州、国外では朝鮮半島南部に自生している。	
樹木特性	<p>スダジイと同じく暖地性照葉樹林を代表する樹種のひとつ。中陽樹～陰樹であるため、適地では優占種として極相林の林冠部を形成する。スダジイよりも内陸部に分布する。</p> <p>ツブラジイの材は菌に冒されやすいことから、寿命が短く、100年を超えることは少ないといわれている。ただし、根元から萌芽再生する能力は高いので、株立ちになったものも多い。</p>	
用途	公園樹、建築・器具材として利用。用材や薪炭用材のほか、シタケのホダ木にも利用される。	
植栽本数/面積 (植栽密度)	114本 / 0.06ha (約 2,000本 / ha)	
特徴	<p>【樹形】 開花期は5月から6月でコジイ（小椎）とも呼ばれる。葉は、先端から半分近くまで鋸歯（きょし）があり、葉身は長さ5~10cmの卵状長楕円形、質は厚く、表面に光沢がある。葉の裏面は、黄金色の光沢を帯びることが多い。</p> <p>堅果（けんか）は、長さ6~13mmの球形。未熟な期間は殻斗（がくと）に覆われているが、成熟すると殻斗が3裂し、黒褐色で光沢のある堅果が現れる。殻斗の外面には鱗片（りんぺん）が同心円状に並んでいる。ツブラジイの堅果は、スダジイと同様に渋味がなく、殻を割るとそのまま食用になる。樹皮は、灰黒色でなめらかである。</p> <p>スダジイに比べると確かに樹皮はなめらかだが、浅い割れ目がある場合もあり、判断に迷うことも多い。また、割れ目ができるのはかなり木が成熟してからなので、幼木・若木ではこの基準で判断できない。特に九州などの温暖な地域では、薪炭林として定期的に伐採されている。</p>	  
試験地での様子	苗木は山引き苗を植栽し、植栽後にコウモリガやカミキリムシ類の穿孔被害による枯死が発生している。その後10年を過ぎた頃からは被害も減少している。また、台風襲来時に穿孔被害が起因すると思われる倒木が発生した。	
被害	コウモリガやカミキリムシ類による穿孔被害が発生した。	

ツブラジイ 現存率



【現存率】

植栽後にコウモリガやカミキリムシ類の穿孔被害による枯死が発生している。

林内の照度調整を図るため平成14年度に本数調整伐を実施した。

平成26年度に毎木調査を実施した結果、現存率は33.3%であった。

※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。

【根元・胸高直径】

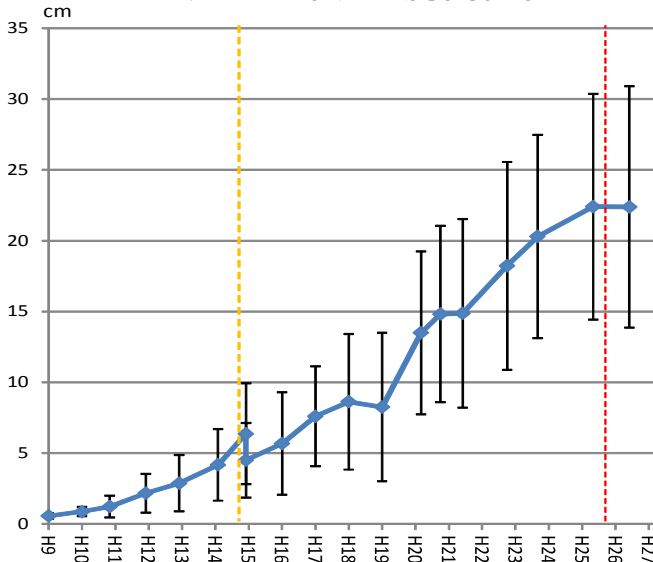
順調に成長している。

平成26年度に毎木調査を実施した結果、平均胸高直径は22.39cmであった。

※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。

※ オレンジ線は、根元から胸高へと測定箇所変更のため、データの連続性はない。

ツブラジイ 根元・胸高直径



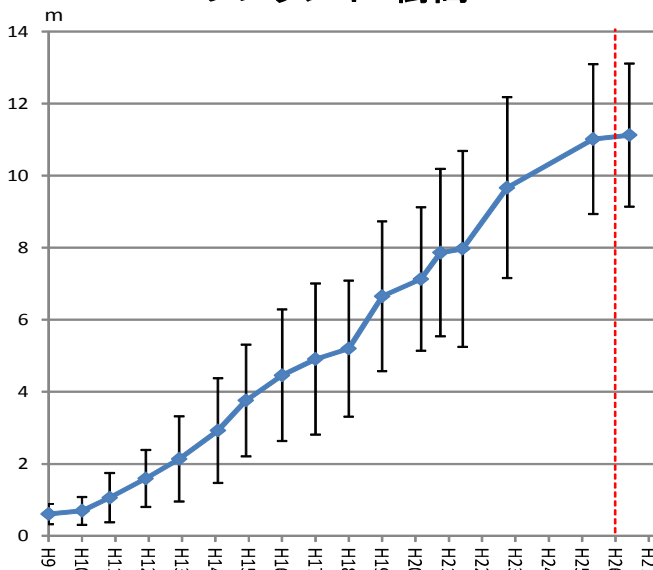
【樹高】

順調に成長している。

平成26年度に毎木調査を実施した結果、平均樹高は11.13mであった。

※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。

ツブラジイ 樹高



《プチ情報》

堅果には渋みがなく、あく抜きをしなくても食べられる。

ツブラジイの親木が生育していると、その周辺地域では稚樹が生育し始め、ツブラジイの森林が形成される。森林の遷移が次第に進行し、最後の段階でツブラジイなどの常緑広葉樹が侵入して安定的に維持されることになっている。しかし、現実的にはコナラ林やアラカシ林などの中にシノキの芽生えが見られる事はほとんどなく、松枯れの跡地などのほとんど裸地に侵入しているのが観察されることが多い。アカマツの枯損木の根元などから芽生えていることも多く、鳥による貯食行動が大きく影響していることがわかる。